

○栃木市の文化

和歌によまれた栃木市

室の八島・しめぢが原・伊吹山を詠んだ歌はおおく、ここにあげたのはその一部です。
(「都賀町史・歴史編」より)

室の八島

惣社明神を室の八島明神ともいい、その名はみやこまでも聞こえていました。またこの地からは、ふしぎな煙がいつも立ちのぼっていたところだということで、むかしはその北接地に煙村という字をあてていた地名もありました。室の八島を詠んだ歌は数多くのこされています。

○東路の室の八島におもいたつ 今宵ぞこゆる逢坂の関 (堀川百首、隆源法師)

○煙立つ室の八島にあらぬ身は こがれしことぞくやしかりける (新拾遺集、大江匡房)

○いかでかはおもひありともしらすべき 室の八島の煙ならでは (詞花集、藤原実方)

○けふりかとむろのやしまを見しほどに やがても空の霞ぬる哉 (千載集、源俊頼)

○さみたれにむろのやしまをみわたせば けふりはなみのうへよりぞたつ

(千載集、源行 頼)

○たえずたつ室の八島の煙かな いかにつきせぬ思いなるらん (千載集、藤原頭方)

○朝かすみ深く見ゆるや烟たつ 室の八島のわたりなるらん (新古今集、藤原清輔)

○風ふけば室の八島の夕煙 ころろの空にたちけるかな (新古今集、藤原惟成)

〇くるる夜は衛士のたく火をそれと見よ 室の八島も都ならねば (新勅撰集、藤原定家)

〇ながむれば寂しくもあるか煙たつ 室の八島の雪の下もえ (金塊集、源実朝)

また「室の八島神は、駿河国（静岡県）富士山の祭神 木花咲耶姫の御子であるから、富士山に登るときこの室の八島に詣でて、ここの竹の葉を持って登れば遭難しない」という言い伝えがありました。戦国時代、永正六年（1509）連歌師宗長もこの地を訪れました。その著「東路のつと」に、

〇朝霧や室のやしまの秋のいろ それともわかぬ夕けふりかな

という発句や

〇東路の室のやしまの秋のいろ それともわかぬ夕けふりかな

などを詠んだことが記されています。